

# 飛騨びと言の葉綴り

HIDA CITY 20TH  
ANNIVERSARY



## 危険と隣り合わせで、人間界と獣界とを越境する、若き飛騨神岡の山師たち

飛騨市のベンチャー企業「(株)速工業」を率いる柿下剛さん44歳。1980年、神岡町船津で誕生。中学時代は、夢中でバスケットボールを追い駆けた。「特待生として岐阜農林高等学校へ行くはずやったのに…。なんせ頭も素行も悪かったし、こっちの中学校側が推薦を辞退しちゃって。そうなるも益々、岐阜農林へ入りたい。でも後は、勉強して実力で入るしかない！当時の先生が、必死に教えてくれて。とにかく猛勉強の毎日。でもお陰で、上位の成績で林業科に見事合格！」。寮生活が始まった。「バスケ三昧の日々。でもレギュラーのスタメン張って、国体にも出場しました」。東京の大学へも推薦状が出た。「でも高校3年間で燃え尽きちゃって。都会へ出て遊びたいから、建設関係の専門学校へ入る事に」。遊びが9割勉強1割の、自堕落な暮らしが始まった。20歳で神岡へ戻り、奥飛騨の建設会社へ入社。現場の監理業務に就いた。「でも残業が多く自由が無くて」。24歳になると神岡鋳業に転職し施設部に。4年ほどたったGW。「自然や山登りが好きで、ロングトレイルってのを知って。バックパックにテントとか備品を詰めて、6日かけて250km、群馬まで歩いて行ったんですよ。群馬の彼女に逢うために！やっと彼女に逢えたら、『風呂も入らず、何で歩いて来たのよ！バックじゃないの？車でさっさと来るべきでしょ』って見事に振られちゃって」。GWの大半がロングトレイルに費やされ、逢瀬を愉しむどころではない。彼女の気持ちも痛いほどわかる。「でも俺的には、物凄い達成感があったんですけどねぇ」。って、まだ言うか！

それから3年後の2011年。懲りずに次のGWには10日間ひたすら歩く、八ヶ岳スーパートレイルに挑戦するつもりだった。「ところが東日本大震災が！その悲惨さを知り、何とかしなきゃと思って！物資を軽トラに山積みして、宮城の石巻までボランティアスタッフに加わろうと車を走らせたんです。今思えば、それが俺の中で転機となったんです」。

翌年、縁あって神岡緑化工業に転職。現在の速工業の素地とも言える、電力会社の送電線の維持管理にあたり、山の中での伐採作業や草刈りに従事した。そして2014年、34歳で速工業を創業。その年、小中学校の同級生だった妻を迎え一女を授かった。わずか3人でスタートした会社も、徐々に営業エリアが拡大。やがて神岡緑化工業が閉鎖となり、そこから3人の社員が合流し社員数も6人へ。「とにかく伐採現場までは、道具類を背負子で担ぎ、急斜面を歩いて行くしか方法がないんです。技術力はともかく、高い場所に登る度胸が必要なんです。まあ俺の場合、体育会系のバスケで培った忍耐力がありましたから、それが今の林業のベースになってるんでしょうねぇ」。登山道でもトレッキングコースでもない、道なき道を進めば、当然、人間界と獣界とを越境することとなる。「そりゃあ、熊やスズメバチ、それにヘビやマムシにイノシシなんて、しょっちゅう出くわします。だから熊鈴着けて、熊撃退スプレーやスズメバチに刺された時のために、アナフィラキシー対応のエピペンとか常時持ち歩くんです」。危険と隣り合わせの、自然界相手の過酷な作業だ。その後北陸電力の送電線の保全作業を請け負っていた建設会社を吸収合併。社員数も16名に膨れ上がった。

「今後は飛騨市の広葉樹を、建材としてブランド化したいと思ってるんです。山林の地権者も高齢化が進み、山を保全するのが難しくなるばかり。故郷の山の魅力を再発見し、ここ神岡の山を守りたいんです。事業を通してお金を稼ぎ、それを今度は地域の若者に再投資して、ひいては飛騨市に貢献するのが夢なんです」。社員の給与を保証し、土日地域イベントなどへ、ボランティアとして参加させるなど、この地域の活性化に対し積極的に一役も二役も買っている。

仮に飛騨市全域を、バスケのコートに見立てるならば、柿下さんは「Coast to coast(コートの端から端まで1人でボールを運び、一気に得点するプレー)」の離れ業に、全力で挑もうとしているのかも知れない。



かきした つよし  
神岡町 柿下 剛さん



市ホームページでは、フルバージョンやこれまでの連載もご覧いただけます。

文/オカダミノル  
(飛騨市観光プロモーション大使)  
イラスト/波岡孝治  
(のみながらにがおえ師)

